

あるところに、昔は金持ちでしたが今はびんぼうになっている家がありました。

ある年の節分の晩、この家に、みすばらしいお坊さんがやって来て、ひと晩泊めてほしいといいました。主人は、

「泊めてくれといわれても、何も食べる物がありません」とことわりました。お坊さんは、

「庭のすみにわらをしいただけでいいから、泊めてください」とたのみました。そこで、主人は、

「それでいいなら、どうぞ泊まってください」といって、お坊さんを泊めてやりました。

夜中ごろ、お坊さんが寝ていると、ひそひそ、ひそひそ、話し声がしました。どうも庭にだれかいるようです。耳をすましていると、

「この家は、何でも粗末にするからびんぼうになるばかりだ。みんな出ていこうじゃないか」といっていました。お坊さんがそつとのぞくと、米の神さま、野菜の神さま、着物の神さま、田の神さま、畑の神さまたちが、集まって話しているのです。

「この人たちは、田んぼはほったらかしだし、畑も草だらけで、なまけてばかりだ」

「取ったものも、食べちらかして、残った物はすてたりする」

「こんな家には、もういたくない」
すると、米の神さまがいました。

「みながおこるのも無理はない。だが、この家には、いい女中がひとりいる。一つぶのご飯も捨てだいに食べる娘だ。それがわしはうれしいのだ。あの女中にめんど、もう一年だけ、みな、ここにとどまって、この家を守ってやってくれないか」

ほかの神さまたちは、

「あなたがそういうのなら、そうしよう」といいました。

あくる朝、お坊さんは、主人に、

「泊めていただいて、ありがとうございます」とお礼をいって、ゆうべの話をしました。

「夜中に庭で、ひそひそ、ひそひそ話し声があるので、のぞくと、おおぜいの神さまが集まって、この家は何でも粗末にするから出ていこうと話していました。けれども、米の神さまが、この家には、一つぶのご飯も捨てだいに食べる女中がいるから、もう一年だけ待ってくださいといっていましたよ」

主人は、

「ああ、なるほど、そうかもしれません。これからはなんでもだいじにしましょう」といって、

お坊さんにお礼をいいました。お坊さんは、
「そうするといい」といって出ていきました。そのお坊さんも、神さまだったのかもしれない。
おしまい

原話…『丹後伊根の民話』立石憲利編著
再話…村上郁